

絵から生まれる物語

活動場所：3年2組教室

10月2日（金）13：55～15：00

提案者 倉又 圭佑

1 活動のねらい

1枚の絵から物語をつくることを通して、絵から感じ取ったことを文章にして表現したり、仲間との表現の違いに面白さを感じたりしながら、物語を創作する楽しさを味わう。

2 活動設定の意図

絵を見て感じたことや考えたことを表現する活動として、「この絵、わたしはこう見る」（光村図書6年）が思い浮かぶ。風景画や抽象画から受け取ったことを分かりやすく伝える文章を書くことをねらいとし、指示語や順序が分かる言葉を用いて、感じたことや考えたことを論理的に表現する子どもの姿を期待する。子どもは絵があることで、その絵がどんな風に見えたのか、その理由はどこをどのように見たからなのかを読み手に納得してもらえる表現に工夫をする。書くことに抵抗感をもっている子どもには、絵の提示とともに大まかな書き方を示すことで、自ら文章を書き始める姿が思い浮かぶ。題材選びをしてから文章を書くことに比べ、あらかじめ絵が題材としてあることで、書くための材料が整い、論理的な文章を書くことに意識が向かいやすい活動例であると考えられる。書く活動において大いに参考にしたい。

今回、子どもは物語の創作に挑戦する。物語の創作は楽しく、自由に書くことで思い思いに表現できるよさがある。反面で、書きたい題材が思い浮かばずに、なかなか書き始められないことも考えられる。子どもにとって、物語を創作する活動は初めてであり、創作する楽しさとともに、物語ができる喜びを感じる活動をつくっていききたいと考える。

そこで、場面が想像しやすい1枚の写真や絵をもとにして、物語の創作に複数回取り組む。その中では、文字のない絵本として知られている「かさ」（太田大八作）の挿絵を使った物語の創作にも取り組む。絵から

物語の設定をつくったり、そこから物語を想像したりして、自らがイメージした1つの物語をつくっていくのである。

子どもは絵から物語を創作することを通じて、同一の絵を基にしながらも仲間との表現の違いに気づくであろう。同じ物を見ているからこそ、見方や考え方の違いが文章に大きく反映され、一人一人が書く文章に驚きや面白さが出てくるよさがある。

絵を基にして物語をつくる活動を通して、物語を創作する楽しさを味わい、物語にさらに親しんでいく子どもの姿を期待したい。

3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

○ 1枚の絵から物語をつくる

限られた情報だからこそ想像が膨らむ。1枚の絵を見ただけで、それがなんであるか子どもは自ら考え始めるだろう。正解はないものの、拠り所として1枚の絵があることから、絵から想像したことや感じたことをもとにして物語がつくられていく。絵から子どもが紡ぎ出した言葉や文の連続によって1つの物語がつくられることで、創作の楽しさを味わっていくのである。

○ 多様な表現に出会う

同じ絵を見ているでもその絵のとらえは異なることがある。当然、表現した言葉や文にもそれぞれの感じ方や考え方が表れるため、似たようなストーリーがつくられたとしても全く同じものではない。子どもは言葉1つの選び方や、そこから受け取る感じ方の違いに気付いたり、大きく異なるストーリーからは自分の想像したものと違いに面白さを感じたりするのである。

多様な表現に出会うことで、言葉の見方・考え方をひろげながら、創作することの楽しさを味わっていくのである。

【絵から生まれる物語】	(全7M)
1枚の写真からつくる	2M
1枚の絵からつくる	2M
「かさ」の挿絵からつくる	3M(本時)

4 対象とかかわる子ども

子どもは、これまで1枚の写真や絵をもとにして物語を創作してきた。はじめは物語を書くことに難しさを感じたり、どのように書けばよいかと悩む子どもも、仲間の書いた物語の書き出しを真似たり、物語の大まかな構成を知ること、少しずつ物語を書くことへの楽しさを感じるようになってきている。

今回、題材にするのは「かさ」(太田大八 作)の挿絵である。描かれた登場人物の表情や姿から、場面をとらえ、何をしているのか、どんなことを思っているのか、想像をひろげながら物語をつくっていく。

(3) 本時の展開 5M・6M/全7M(65分)

時間	番号;子どもの活動 ・ ;子どもの姿	○ ; 教師の手立て
5	1 仲間の書いた物語を聞く ・ 楽しみながら聞く。 ・ 自分がつくった物語との違いに面白さを感じる。	○前時に子どもが書いた物語をいくつか紹介する。
20	2 文と文のつながりを意識した表現を考える ・ つながりがない表現に出合う。 ・ 表現をよりよくつくりかえる。 ・ 時間の流れがわかる言葉をつかうよさを話す。 ・ 登場人物の気持ちだけでなく、場所のことも書くとよいと話す。	○つながりのない表現を提示して、加えた方がよいことを確認する。 ○時・場所・人物に関する表現が適度に入ることを促す。
30	3 1枚の絵から物語を創作する ・ 場所や時間を想像する。 ・ 自分が書きたい物語の設定をノートに書く。 ・ 物語を創作する。	○絵から想像した場所や時間を共有する。
10	4 できた物語を発表する ・ 仲間がつくった物語の楽しさを味わう。 ・ 多様な表現の仕方があることに気付く。	○できた物語をいくつか紹介する。

5 本時の構想・展開

(1) 本時のねらい

1枚の絵から物語をつくることを通して、絵から感じ取ったことを伝わりやすい言葉で表現したり、仲間との表現の違いに面白さを感じたりしながら、物語を創作する楽しさを味わう。

(2) 本時の構想

○ 文のつながりを意識した表現とは何かを考える

子どもは思い思いに物語を創作するのだが、前後とのつながりのないストーリーには違和感を抱く子どもが出てくるであろう。そこで伝わりやすい表現にするとどうするかを考えることで、場面の移り変わりが伝わるように表現したり、時間の流れを意識した表現にしたりすることで、物語全体としてのまとまりのある内容になるように表現を工夫していく。

6 活動の振り返り

(1) 書きたい物語のイメージがひろがる

活動の始めに前時の活動で子どもが書いた物語をいくつか紹介した。右に示した1枚の絵からどんな物語が出来たのか、子どもは期待しながら教師が読み上げる物語を聞く。



1つ目に紹介した物語の題名は「お洋服屋さん」。着る服が少なくなった男の子がお母さんをお願いして服屋さんに行くという話。背中に担いでいるリュックはエコバックの代わり。お母さんや店員さんに準備がよいと褒められる話である。2つ目は「幼稚園」という題名の物語。幼稚園で折り紙を使ってお母さんにプレゼントを作り、リュックの中に入れたそのプレゼントをお母さんに渡して喜んでもらったという話である。3つ目に紹介したのは「お泊まり」という話。一人で新幹線に乗って友だちの家へお泊まりに行く不安を、男の子がリュックに入れた電車のおもちゃで紛らわせて、お友だちの家に着くという話である。子どもは一つ一つの話に興味をもったり、次の展開を予想したりしながら、楽しんで物語を聞いていた。聞くことで、「さあ今日も書きたい」と書くことへの期待も膨らんでいった。



(2) 書いてあることの違和感に気付く

1つの絵から様々な物語が生まれる。子どもがつくる物語は多様であり、イメージーションが素晴らしい。だから、子どもの感性を大事にした創作活動をつくりたいと教師は願う。

しかしながら、子どもの中に次々に生まれる想像と実際に書いた物語の間に、ズレが生じることがある。唐突に場面が変わったり、全体としてのまとまりを欠いたりしては、表現として不十分である。構成や設定を意識して物語の創作に取り組むための手立てが適宜必要なのである。

そこで、この時間は文と文のつながりに注目させるために、ある子どもが創作した物語を提示し、表現の仕方や全体のまとまりについて考

える時間を設けた。子どもに示した物語は次の通りである。

あるところに、お母さんと男の子がいました。

男の子は朝早くに目をさました。いつもとちがうところがありました。いつもは、うで時計がなくて目をさましていましたが、今日はなりません。いつもうで

計をおいているつくえの上を見ました。しかし、うで時計はありません。男の子はこう言いました。

「どうしよう。お母さんに買ってもらった大切なうで時計がない」

そう、男の子のうで時計は、お母さんに買ってもらった、大切なうで時計だったのです。男の子は、あせりながらも、お母さんに言って、昨日歩いた道をさがしに出かけました。

しかし、そこにもありません。そこでお母さんは、「また買ってあげるから、もう帰りましょ」

と言いました。でも、男の子はあきらめません。そのうで時計はインターネットでちゅうもんしたうで時計だからです。買うのに2週間くらいかかります。なので男の子はあきらめません。けっきょくあきらめました。

でも、たいへんいいことがありました。家の近くの時計屋さんと同じうで時計が売っていたのです。そこでうで時計を買いました。男の子はよろこびながら、お母さんと手をつないで楽しく帰りました。

これを読んで子どもは、「腕時計で朝起きるって面白いね」「インターネットで買ったっていうのは安かったからかな」などと感想を吐く。そして、この物語の面白さについてひとしきり感想を話した後に物語の気になる部分について指摘を始める。

「あのさ、あきらめないって言ってて、あきらめちゃうのはちょっと変じゃないかな」

「突然すぎると思うな」

「文章の流れがおかしいから、『けれども』っていう言葉を入れて、『けれどもけっきょくあきらめました』にすればいい」

「『けれども』より、『探しても探してもなかったの』の方が諦めた感じがするんじゃないかな」

1カ所の違和感からよりよい表現について思考し、文章の流れを意識した表現へと修正を加えていった。アイデアや展開の面白さを大切にしながらも、文章の流れを意識し、全体のまとまりを大切にすることが、よりよく伝わる表現になることを子どもは例文に修正を加えながら学んでいった。

(3) 書くための材料と方法

「では今日の1枚は…」と教師が提示したのは字のない絵本の中から選んだ1枚の絵（「かさ」太田大八）である。この絵を選んだのには理由

がある。それは主人公となる人物（動物含め）が複数想定できること。また、人物の関係をつないでつくる物語も、伏線にする物語も想定できるからである。文字のない絵本であるからこそ、1枚の絵から広がる想像は多様である。



子どもに絵を提示したところ、子どもはそれを凝視しながら、物語の設定をつくり始めた。登場人物は「男の子とお母さんと女の子」、場所は「池の前、公園、帰り道」などが出てきた。時は、「雨の日」という発言から、「6月」「梅雨の時期」などという言葉が出てくる。それぞれに膨らませた物語の設定を基にして、物語の創作に取りかかった。

子どもは嬉々として作文シートに鉛筆を走らせる。ここから20分間程は教室が静まり返り、鉛筆を走らせる音しか聞こえない。子どもは何度も絵を見返しながら、絵の細かい部分にも注目した。書いては消し、書いては消しを繰り返しながら、「はじめ」に書いた物語の設定が「中」で生かされているのか。「おわり」と上手くつながっているのか。書きながら考える子どもの姿があった。

活動の終末、「書いた物語を発表したい人はいますか？」と子どもに声をかけると数人の手が挙がる。そこで幾つかの物語を共有した。仲間がつくった「美容師」という題名の物語に驚いたり、自分と似た物語であることに共感したりしながら、この日も物語を創作することのよさを感じていった。

(4)「書くこと」から「読むこと」へ

これまで、物語を創作する活動をつくる際には、典型的な物語の構成要素を含む物語を対象にし、物語の全体構成を学ぶことで創作に生かす子どもの姿を思い浮かべることが多かった。



しかし、今回のように、物語を書くことで、物語の構成や設定、文と文のつながりや流れを意識した表現の必要性に自ら気付いていく子どもの姿は、逆のアプローチもまた然りであることを示したといえる。それは物語の創作のみならず、物語を「読むこと」の内容とも強くかかわる姿であったからである。

今後は、「読むこと」「書くこと」の相互の行き来をいっそう意識した活動を思い描くことで、子どもの学びがつながり、深まることが期待される。

最後に、本時の中で情景描写を含む物語を創作した子どもの物語を紹介する。子どもにもプリントにして配付し、感想を交流する機会を設けた。

「お兄ちゃんのかさ」

あるところに、お母さんと男の子と妹の女の子がいました。女の子のお兄ちゃんは小学校五年生です。その日は雨がふりました。

女の子とお母さんはこまりました。なぜかという、お兄ちゃんがかさをわすれたからです。お母さんはかさをとどけに行きたいけれど、仕事にいかなくてはいけません。だからお母さんは女の子にこう言いました。

「お兄ちゃんに、かさをとどけてくれない？」
妹は、「わかった」と言い、赤いかさをさして、お兄ちゃんにかさをとどけにいきました。

池の前を通るとき、かもの親子がいました。女の子はかもの親子を見て、

「いいなあ。本当はとどけにいきたくないのに」
と言いました。そして気がつくと時間がかなりたっていました。女の子はあわてて、かさをもってお兄ちゃんのところに向かいました。そして学校に着きました。

お兄ちゃんが、ちょうどげんかんの前にいて、空を見ながら待っていました。女の子は走って、お兄ちゃんのところまで行き、かさをわたしました。そしたらお兄ちゃんは、「とどけにきてくれたの？ありがとう」と言いました。そして二人はいっしょに帰りました。妹は、

「かさをとどけに行くのもいいなあ」と心の中で思いました。

どうして傘を届けに行きたくない気持ちと、かもの親子の様子がつながり、「いいなあ」と女の子は呟いたのか。子どもは、かもの親子から見える女の子の気持ちを受け取りながら、今度は自分もこんな表現をつくってみたいと思いを語るのである。その子どもの姿には、書きたいと思いと書ける自信が強く伝わってきた。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先 kkura@juen.ac.jp (倉又圭佑)